

夢か幻か、それともまさかの現実か。

これは鳥取県内のガソリンスタンド「じくはら石油」で働くおたねの、不思議な不思議なある一日のおはなし。



「わあ！ この子もかわいいですね〜！」

おたねが覗き込むケースの中にあるのは、今月から新しく展示された可愛い女の子のフィギュアだ。

今日は休日。おたねはお気に入りの柿ちゃん——実は長くおたねと過ごすうちに付喪神になったが、みんなには内緒である——と一緒に、地元、鳥取県倉吉市にある円形劇場くらしフィギュアミュージアムに遊びに来ていた。

ここはおたねのお気に入りの場所で、あれも可愛い、これもかっこいい、と声を弾ませながら展示を眺めていく。

もちろん、柿ちゃんもおたねの頭の上から展示を楽しんでいた。

展示の中にはキャラクターや動物などのフィギュアだけでなく、建物や風景のジオラマもある。

小さくなったリアルな景色を上から眺めていると、まるで自分が巨人になったような気分になった。

「そうだ……！ この円形劇場もジオラマになったらおもしろそうです。上から丸ごと全部見下ろせたら、きっと楽しいです♪」

もしも円形劇場がジオラマになったら。

「普段は見えないところも見えるかもしれませんねえ。まだまだ知らないところもたくさんあるのかも」

おたねと柿ちゃんが想像を膨らませた、その時だった。

——ピカーツ！！

ほんの一瞬、展示室が眩い光に包まれた。

「わ！ え……、今の光はなんでしよう？」

周囲を見渡すが、特に変わったところは見当たらない。

気のせいかと首を傾げ、おたねが展示に視線を戻したその瞬間、今度は急に視界が暗くなった。

電気が消えたわけではないし、室内なので天気も関係ない。

おたねは何気なく視線を上に向けた。

「わ、わわ！ か、柿ちゃん!？」

おたねの頭の上にいる柿ちゃんが、まるで風船が膨らむように少しずつ大きくなって照明の光を遮っていたのだ。

「柿ちゃん!？ どうしたんです!？」

咄嗟におたねが頭上に手を伸ばして柿ちゃんを掴む。既にビーチボール程度のサイズになっている柿ちゃんを頭からおろして抱きかかえた。

大きくなった柿ちゃんは、風船のようにプカプカと浮力を持ち始める。

「わ、わ、どうしましょう!？」

おたねが困惑している間にも、みるみる柿ちゃんは膨らんでいく。

このままでは部屋から出られなくなってしまいかもしれない。そう判断したおたねは、慌てて展示室を飛び出して、屋上への階段を駆け上がった。

「はあ、はあ……どうしましょう……! わ、わわ……このままだと柿ちゃんが飛んでっちゃいます……!」

どうにか途中の扉に引っかかることなく屋上にたどり着くことが出来たが、問題が解決したわけではない。

おたねは手の中からずりりと抜け出して飛んで行ってしまいそうな柿ちゃんを、なんとか抱えて周囲を見渡す。

「おたねちゃん!？ どうしたの!？」

声を掛けてきたのは、顔馴染みのミュージアムのスタッフ、ツバキだった。ツバキは段ボール箱を抱え、その中からは掃除用具やロープがはみ出している。

「あーっ! ツバキさん、そのロープ貸してください!」

「え、これ?」

「ちよつとだけ柿ちゃんをお願いしますっ!」

「えっ、え!？」

おたねは柿ちゃんをツバキに手渡し、その隙にロープをしっかりと柿ちゃんのヘタにくくり付ける。

「わ、どんどん大きく……! か、柿ちゃんどうしちゃったの!？」

「私にもわからないんです! ……出来ました! ツバキさん、離して大丈夫ですっ!」

ツバキが柿ちゃんから手を離すと、柿ちゃんは本物の風船のようにぷかりぷかりと宙に浮かんだ。

おたねはロープの端をしっかりと握り、ほつと息を吐く。

「はあ……これで一安心です……って、わ、わわわ!」

ぐん、とロープを宙に引かれる力が強くなり、おたねがバランスを崩した。

「おたねちゃん！ 柿ちゃんまだまだ大きくなって！ おたねちゃんごと飛んでっちゃうわ！」

「ど、ど、どうしましょう……うわっ、わ、わ！！」

「こっち！」

ツバキがおたねの持っているロープと一緒に掴む。二人で力いっぱい引っ張って、どうにか屋上の柵に括り付けた。

「ふう……ツバキさん、ありがとうございます！」

「どういたしまして。にしても……」

二人は同時に空を見上げた。

ロープから繋がる先には、大きくなり続けている柿ちゃんが浮かんでいる。もう一人で抱えるのは難しそうな大きさだ。

「原因はわからないのよね？」

「わからないです……展示を見ていたら急に大きくなり始めて……」

「うーん……目立つから円形劇場の宣伝にはなるかもしれないけど……」

「柿ちゃんがいけないのは困ります〜！」

「ぶっちんって針を刺したら、中からもとの柿ちゃんが出てこないかしら」

「……出てこなかったら柿ちゃんはどうなっちゃうんです？」

「……そうね、やめましょう」

二人で柿ちゃんを見上げながら腕組みをして考え込む。

「このまま大きくなって、円形劇場ごと飛んでっちゃうたらどうしましょうね」

ぼそりとツバキがそう口にする、おたねがサッと顔色を変えた。

「……それは大変です！！ はやく……早く何とかしなくちゃ……！！」

「いやいや、おたねちゃん、流石に冗談……」

ツバキの声も耳に入らず、慌てふためくおたねが「はっ……！」と何かを思い付いた。

おたねがバチリとひとつ瞬きをすると、瞳が紅く染まり、ぶわりと闇のオーラがおたねを包みこむ。

「……ついにわが漆黒の力を解き放つ時が来たか……、今こそ闇の楔で……」

「おたねちゃん！？ ストップストップ！！ 冗談でも闇の力は困るわ！ お客さんがびっく

りしちゃう！」

「はっ！ 私としたことが！」

ツバキの声に、おたねが我に返った。

その後もあれこれと二人で頭を悩ませるが、結局、解決方法は思い当たらない。

「原因がわからないと難しいんでしょうか……でも本当に心当たりがないんです……まさか柿ちゃんが風船みたいになっちゃうなんて……」

「……そういえば」

おたねの言葉に、何かに気付いたツバキがスマートフォンを取り出して検索を始める。

「あった！ おたねちゃん！ 関金温泉はどう!?」

「関金温泉……ですか?」

関金温泉は、鳥取県倉吉市にある温泉だ。

ツバキがスマートフォンの画面をおたねに見せる。

「ほらここ！ 関金温泉では、鶴が傷を癒していたという話があるの。今回は怪我ではないかもしれないけれど、変わってしまった姿をもとに戻すって考えれば、試してみる価値はあるはずよ！」

おたねはスマートフォンの画面から顔を上げて頷く。他に手がかりがない以上、思い付いたことは片っ端からやってみるしかない。

「……わかりました！ 私、貰ってきます！」

走って屋上からの出口へ向かい、そこで立ち止まって上を見上げた。

「柿ちゃん！ 飛んでっちゃだめですよ！ すぐ戻ってきますからねーっ！」

ぶかぶかと空に浮かぶ柿ちゃんからの返事はないが、ふわりと風に揺れた姿が頷いたようにも見える。

おたねは「待っててくださいねー！」ともう一度叫び、急いで関金温泉へと向かった。

「ごめんくださいーい！ 女将さーん！」

円形劇場を飛び出したあと、おたねはすぐに関金温泉の馴染みの旅館を訪ねた。

息を弾ませながら玄関口で叫ぶと、旅館を一人で切り盛りする女将が顔を出す。

「あら、あらあらあら。どうしたの、おたねちゃん。大丈夫? お茶……お水の方がいいかしら

……」

「ちょ、ちょっと待ってくださいー！」

「はいはい、なあに?」

女将は立ち止まり、丁寧な動作でその場に座っておたねの話に耳を傾ける。

「か……柿々然々で温泉をもらえませんか!?!」

「あら、何だかよくわからないけれど柿ちゃんが大変なことだけはわかったわ、ちょっと待ってね」

女将は奥から飲料水用の大きなボトルを持ってくると、温泉をいっぱいに汲んでくれた。

「さあ、どうぞ。ここの温泉は飲めるからね。柿ちゃんに飲ませてあげて。柿ちゃんがなおりますように」

「ありがとうございますー！」

おたねは何度もお礼を言って、ボトルを抱えて旅館から出た。

「……え？ ええーっ!？」

円形劇場の正面に辿り着いたところで、おたねが上を見て立ち止まる。

円形劇場の真上は橙色の丸いものですっぽりと覆われており、辺りはその影で暗くなっていた。

「か、か、柿ちゃんがあんなに大きく……はわ、はわわ……」

「おたねちゃん！ はやくー！ 屋上にきてー!」

「……! ツバキさん！ はい！ 今行きますっ!」

ツバキが屋上で大きく手を振っているのが見える。その声に我に返ったおたねは手を振り返し、慌てて円形劇場に入って屋上への階段を駆け上った。

屋上への扉を開けると、下から見るよりもさらに大迫力の柿ちゃんが真上に浮かんでいる。

「柿ちゃん！ 戻ってきましたよーっ!」

大きすぎてよくわからないが、柿ちゃんが返事をするようにゆらりと揺れたような気がした。

「おたねちゃん、おかえりなさい！ 温泉はもらえた？」

「はい！ これを飲ませてって言われたんですが……柿ちゃんにどうやって飲ませたらいいんでしょう……？ そもそもあんなに高いところにいたら届けられません……こうなったら、ニヨロニヨロって柿ちゃんのところまで行くという手も……」

「おたねちゃん？」

「な、なんでもないですっ!」

おたねが慌てて首を振る。

とにかく、大きくなった柿ちゃんに温泉を飲ませるために、おたねはボトルに入った温泉を大きなタライに移した。

「これで飲んでくれるといいんですけど……あとは、どうやって届けるかですよね……」

考え込むおたねに、ツバキはフフと得意げに笑って声を掛けた。

「おたねちゃん、柿ちゃんをおろす方法は考えてあるから任せて!」

「へ？ どうするんです？」

「じゃーん！ 皆に集まってもらったの！ この人数で引っ張れば、きっと柿ちゃんをおろすことも出来ると思うわ!」

おたねは上空の柿ちゃんに夢中でまったく気が付いていなかったが、屋上を見渡すとそこにはたくさんの人達が集まっていた。

よく知った円形劇場のスタッフや、今日たまたま居合わせた観光客、それから近所の人達までいる。

「わ……みなさん！ 本当にありがとうございます……!」

「さあ、皆！ そろそろいくよー!」

ツバキの合図で、集まった人達が柿ちゃんに繋がるロープに手を掛けた。

それぞれが位置についた様子を確認し、おたねが大きく息を吸い込む。

「それでは、いきますよーっ！ ……せーのー！！」

おたね自身も渾身の力を込めてロープを引いた。

息の合った全員「よいしょ」の掛け声と共に、巨大な橙色の球体と円形劇場がまるで合体するかのよう近付いていく。

「おたねちゃん！ 今よ！」

「はいっ！」

ツバキの合図でおたねはロープから手を離し、用意しておいた温泉入りのタライを両手でしっかりと持ち上げた。

「柿ちゃん！ 関金の温泉です、飲んでくださいっ！」

——ぼちゃん！

タライの中の温泉に、柿ちゃんの表面がひたりと浸かった。

その瞬間、まるで温泉が吸い込まれていくかのようになくなっていく。

「の、飲んでるのかな……？」

タライがみるみる軽くなり、温泉を全部飲みきった、そのとき。

——ポンッ！！

「うわーっ！！」

柿ちゃんが突然元の大きさに戻り、浮力が急になくなった反動で、ロープを引っ張っていた人達が一斉にひっくり返った。

「えっ！？ わー！ 皆さん大丈夫ですかーっ！？」

おたねが慌てて駆け寄るが、手伝ってくれた人達はそれぞれに起き上がり、おたねの頭の上を確認してにこやかな表情を浮かべている。

その視線につられて、おたねが自分の頭の上に恐る恐る手を伸ばした。

「柿ちゃん……？ 柿ちゃんっ！！ よかったですーっ！！」

柿ちゃんを頭の上からおろし、両手でそっと包みこむ。

その姿を見たツバキが、あはは、と豪快に笑った。

「よかったね。やっぱりおたねちゃんと柿ちゃんは一緒にいないと落ち着かないよ」

「はい！ ツバキさん、皆さん！ 本当にありがとうございました！」

覆われていた影がなくなり、すっかり明るくなった円形劇場の屋上が、たくさんの笑顔と笑い声で溢れた。

「……それにしても、本当に何だったんでしょ？」

手伝ってくれた人達に何度もお礼を言い、おたねと柿ちゃんは元いた展示室へと戻ってきた。

「柿ちゃん、もう大きくなっちゃダメですよ」

おたねは頭の上の柿ちゃんに両手を伸ばし、サイズが変わっていないことを確認してホッと胸を撫でおろす。

「ふう、よかったです。……さ、帰りましょうか」

おたねが出口へと足を向ける。

展示室から出る途中で、おたねはなんとなく視線を感じてその場で振り返った。しかし、そこに人の姿はなく、あるのはたくさんのフィギュア達だけだ。

「……？ 気のせいでしょうか」

おたねは首を傾げて向き直り、再度出口へと足を進める。

この時、おたねの頭の上で柿ちゃんはフィギュア達にウインクし、満足そうに笑みを浮かべていた。

上空から見た見た円形劇場は、とてもリアルなジオラマのようだった。いつも見ているはずの建物が新鮮に見えて、小さく見える建物も、周囲の街も、そしてたくさんの人々も、全部が愛おしく思えた。

いつか本当に円形劇場がジオラマになって、おたねにも見せられたらいいなど、そんなことを思いながら柿ちゃんはそっと目を閉じた。

「ふわぁ……、それにしても変な一日でしたね。そうだ……！ お世話になったお礼もしたいですし、温泉に浸かりに行きましょうか！」

おたねの頭の上で、柿ちゃんが嬉しそうに小さく揺れた。